潮騒
第24号
平成19年
8月1日

財団法人 日本殉職船員顕彰会
〒102-0083 東京都千代田区麹町四-五
海事センタービル
電話 〇三-三二二四-〇六六二
FAX 〇三-三二二四-〇六八二

海洋永遠の平和を

第37回戦没・殉職船員追悼式

第三十七回戦没・殉職船員追悼式が五月十一日神奈川県横須賀市観音崎公園にある慰霊碑前において、遺族、海事関係者など約六百五十人が参列し、しめやかに執り行われた。関係者をはじめ、来賓として小泉純一郎・前内閣総理大臣、塩川正十郎・元財務大臣も参列、遺族と共に海洋永遠の平和を祈った。

あいさつする小泉前首相

小泉前首相が献花

塩川元財務相も

「千の風になって」「我は海の子」「椰子の実」海上自衛隊横須賀音楽隊のおごそかな演奏の後、式典の開始となった。

式典は午前十一時にはじまり、国歌斉唱、一分間の黙祷が行われ、相浦会長の式辞、小泉純一郎前内閣総理大臣のごあいさつ、安倍晋三内閣総理大臣追悼の辞（冨士原康一海事局長代読）来賓及びご遺族等参列者全員による白菊の献花、観世一門による能楽「海霊」が奉納され、式典は終了した。

相浦会長は「今日わが国が平和と繁栄を享受できているのは、戦没・殉職船員の尊い犠牲の上にあることを私たちは決して忘れてはなりません。多くの御霊に追悼の誠を捧げかけがえのない肉親を亡くされたご遺族の心情に思いをいたし、心から敬弔の意を表するものであります」と式辞を述べた。

また、来賓を代表し小泉純一郎前総理大臣が、「戦時平時を問わず海に囲まれた日本にとって、海上交通は死活的問題だ。先人のご苦労とご努力があるからこそ平和と繁栄の中で暮らせることを忘れてはいけない。ご遺族の方々は、今もなお亡くなられた方への悲しみが消えることはないと思う。亡くなられた方々のご冥福と、今後の平和と繁栄を祈ります」とあいさつした。

内閣総理大臣追悼のことば

安倍内閣総理大臣

第三十七回追悼式に当たり戦没・殉職船員の方々の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。先の大戦において、六万人余りの船員の方々が尊い命を失いました。また戦後も海難や労働災害によって二千八百人を超える方々がその職に殉じています。今日のわが国の平和と繁栄は、多くの尊い犠牲の上に築かれています。祖国の未来を信じて蒼海深く散った船員の方々の御霊の前で、未永い平和と海上交通の安全への誓いを新たにするものであります。

ご遺族の皆様の深い悲しみに思いを致すとともに、戦没殉職船員の方々の安らかな眠りを心からお祈りします。

平成十九年五月十一日

内閣総理大臣　安倍晋三

初めて参列の追悼式

安らかにお眠り下さい

殉職船員奉安者

追悼式に先立ち、本年は四月十六日十八人を慰霊碑内に浄書奉安した。

業種別の内訳は、外航一人、内航六人、水産十一人となっている。

澤根　禮二　福洋汽船(株)
小野寺義雄　船主・荻野精一
木浦　賢治　船主・木浦賢治
松谷　竜司　(有)五嶋水産
田本　宏二　中見海運(有)
丸橋　徳吉　(有)丸橋漁業
住吉　卓　(株)泉漁業部
阿部　善行　船主・阿部　悟
冨田　弘志　船主・三戸英雄
新町　圭三　船主・三戸英雄
濱田　兼重　明神水産(株)
工藤　修一　秀洋汽船(株)
工藤　博也　秀洋汽船(株)
工藤　英一　秀洋汽船(株)
藤原　洋大　五十川汽船(有)
上出　正則　寝屋海老篭漁業
小野寺正克　池田水産(株)
川井　悦夫　住力商事

中央　室岡　卓さん　右　松井邦夫さん
左　小野寺功一さん

北上市　**室岡　卓**

五月十一日、慰霊祭に初めて出席させて頂きましたが、普段、大声で斉唱する「君が代」は、感極まって声が出ませんでした。

そのあと一分間の黙祷が行われましたが、海上自衛隊横須賀音楽隊が静かに「国のしずめ」を演奏し、さらに参加者全員が白菊を献花する間、レクイエム「君は帰る母なる海へ」が演奏され感激いたしました。

戦没された方がたの御霊に対し、戦後半世紀を過ぎても追悼を捧げる船舶関係者の皆様に対し、誠に有り難く深く感謝申し上げます。

新潟市　**水野　孝子**

平成十九年五月十一日の「第三十七回戦没・殉職船員追悼式」に出席させていただきまして心より御礼申し上げます。前日迄の風雨が嘘のごとくの晴天のもとで浦賀水道、太平洋の水平線を遥かに見渡す場所での式典でした。とても立派な追悼式でした。

水野さん、夫・忠彦さんと

父が亡くなったのが昭和十八年四月、すでに六十年以上経ちました。父と別れた時はほんの幼子だった私もいい年になりました。母は十数年前見送りました。私自身、近年体力等の低下が急に感じられ、自分一人の力で出席出来るぎりぎりの年齢と思い、どうしても今年は参りたいと思いました。

追悼式・献花する遺族

まず、インターネットで顕彰会様のホームページをよくよく拝読させていただきました。「戦没・殉職船員の奉安（浄書）」の意味に目が留まりました。「永久保存が可能な和紙に没年月日と氏名を浄書し、ステンレスの箱に納めて奉安されております。」と書かれてありました。有り難いことと思いました。

式典の最後に、参列者全員が、一人づつ白菊一輪を献花させていただき、胸がいっぱいになりました。やがて子である私も年を重ね、この世を去ります。しかし、この様に多くの方がた様が追悼して下さることをしっかりと目にして安心と限りない感謝の念を持ちました。父及び多くの亡くなられた方がた様に思いを馳せ、お祈りさせていただきました。

浦賀水道の明るい海原を見て父達はどんな気持ちで船に乗って行ったのかしら…。と思いました。

帰宅後、顕彰会様からいただいた「白菊一輪」「DVD」「お饅頭」を仏壇に供え無事出席出来ましたことを報告いたしました。会長様はじめ多くの方がたのお力で毎年この式典がかくも立派に行われて来られたことと思いました。出席させていただいて良かったとしみじみ思いました。今後も自己の健康管理に留意して、出来る限り出席させていただきたく思いました。厚く御礼申し上げます。

北海道江別市
酒井章雄さん

三井船舶所属・昭武丸（二〇〇五総トン）酒井正志機関長の遺族。

章雄さんは高校の教員を退職後、追悼式典には初めての参加。父親の乗っている船が尾道に入港したとき、母親に連れられて北海道から二昼夜以上もかけて訪船した事を今でも鮮明に覚えているという。

昭武丸は、昭和十八年三月六日船団を組んでシンガポールを出航、アンダマンのカール・ニコバルに向かっていた。八日パラワン沖付近を航行中、英国潜水艦シーローバーの雷撃を機関室に受けて徐々に沈没。重装備の陸戦隊員の多くと、乗組員四人が戦没した。

なごやかに懇親会

追悼式典終了後、参列者はバスに分乗し京急ホテルの懇親会会場に集合した。

相浦紀一郎会長より、「小泉純一郎前内閣総理大臣のご参列を受け、晴天の中で無事終了できたことは皆様のおかげです」と謝意が述べられた後、塩川正十郎元財務大臣のご挨拶、引き続き国土交通省冨士原康一海事局長の献杯のご発声があり、遺族と共に四〇〇名以上の方がたがそれぞれの想いを語り合った。

塩川元財務相をかこんで

塩川元財務大臣は挨拶の中で「日本民族というのは海と切っても切れない関係がある。その仕事に従事しておられる方がたが不幸にして不本意な死を遂げられたことは非常に残念だったろうと思う。こうして皆様方の手で毎年、慰霊祭を行うことは非常に尊いことだと思う。世の中が殺伐として人情もなければ義理もないという世の中に、日常をかえりみて、遺族のためを思うことは非常に美しい心である。この気持ちを大事にするならば日本のこれからは絶対に大丈夫。この心を忘れたら、日本は滅亡に向かうと思う。今日の慰霊祭はただ単に亡くなった方の慰霊をすることだけでなく、私たちの日本はということをもう一度思い出すきっかけにして頂けたらいいかなと思う」と述べた。

塩川正十郎先生へ

株式会社ベリタス
会長　**飯田耕作**

本日は思いがけなく有意義な追悼式に御相伴させて頂き有難うございました。

予期していなかった色々な感慨に浸らせて頂きました。まず、戦没殉職船員の追悼碑を何とよい場所に建てられたかと思いました。茫洋たる大海原を遥かに望み、追悼する者の心が遥か南方で散華された方がたを偲ぶ場所として、関東南端にも位置し、海霊との交信の場所としては、最高の場所で追悼の雰囲気が醸し出せると思いました。

鹿児島の知覧の飛行場跡に佇んだ時がありましたが、その場所も地平線に見えるような遥か南方を見通せるような気分になりました。戦没船員の方々は海軍の将兵と違い、刃向うことも斧を振り上げることもなく、只赤子の手を捻るように屠られ海の藻屑と化され、その無念さは軍籍にあった者の比ではないような気がしました。

遺族の方々の胸の○○丸という名札は、何だかその人が今歩いているような感じで多難な戦後を乗り越えて来られたのだろうと思いました。加えて観世流の作詞も素晴らしい内容で海霊という能と共に感銘いたしました。

この追悼式は、私は寡聞にして存じませんでしたし、報道でも読んだ記憶がありませんが、天皇皇后両陛下も参列されていることもむべなるかなと思いました。これを毎年気候のよい五月初めに追悼式を続けておられる相浦会長以下関係者の方がたのご努力にも感服した次第であります。

塩川先生が言われましたように、日本国民がこういう方がたの犠牲があって我々の今日があるということを忘れない為に、マスコミはつまらない事に血道を上げないでこういう行事をその都度大きく報道すべきだと思いました。

本日はどうも有難うございました。厚く御礼申し上げます。

同僚と六十二年ぶりに再会

前田俊文さん（七十七才・三重県志摩市）と中村幸三さん（七十七才・東京都三鷹市）は、徴用船『日鉄丸』の見習甲板員であった。

『日鉄丸』は昭和十九年十月マニラからボルネオ島に向かう途中、魚雷を受け沈没したが、二人は救助され日本に生還した。昭和二十年一月二人は呉市で別れた。中村さんはそのまま故郷へ戻りその後連絡はとれなくなっていた。

『戦没船員の碑』の前にて
左　前田さん　右　中村さん

前田さんは十年ほど前から同僚の消息さがしをしていた。特に船が沈没して漂流したときに、救助されるまで励まし合った同僚に会いたいという思いを強くしていた。

前田さんは、平成十九年一月に青森県の地方紙『東奥日報』の『旧海軍乗組員の山本少年兵どこに』という記事で青森県出身の元同僚の情報提供を呼びかけた。

この記事を偶然インターネットで読んだ全日本船舶職員協会の理事であり追悼式実行委員の荒谷さんが、「民間船の船員のことだから顕彰会でなにかわかるのではないか」と当会に照会してきた。

当顕彰会には昭和四十六年『戦没船員の碑』を建立した際、厚生省援護局の原簿に基づき作成した戦没船員名簿と、昭和五十六年当会が新しく設立されたのを契機に、各会社（主として商船）から提供をうけた戦没船員に関する資料が保管されている。この資料は、会社や船によってかなり詳細の度に違いがあるが、主として最期の状況に関する船長や代理者から会社や軍に報告された文書や戦死、生存等が分かる乗組員名簿等である。幸い書庫に『日産汽船日鉄丸乗組員名簿』があった。

しかし、その中に前田俊文さんの名前はあったものの『山本姓』の乗組員は掲載されていなかった。

残念な思いで『名簿』をしばらく眺めていると、『前田俊文』の隣の欄に記載されている『中村幸三』が青森県出身で同い年、同じ職種であることに気がついた。名簿の中で青森県出身はこの中村さんだけであった。もしかしたらと思いすぐに前田さんに電話をし、名簿の話をした。「なかむらこうぞうさん」とお伝えすると当時の記憶が蘇ったのか前田さんはすぐに「こうぞうは幸せの幸に漢字の三ですね」と叫ぶように言った。前田さんは中村さんを『山本』と勘違いしていたようだ。「本人と確認できたら、すぐにでも会いたい」と前田さんは期待を膨らませていた。

名簿に記載されている住所は当時の本籍地のみだったので、前田さんは『東奥日報』に再調査を依頼し中村さんの親戚を探しあてた。親戚から連絡を受けた中村さんが、東京から志摩の前田さんの自宅まで車を走らせ感激の再会となった。実に六十二年振りのことである。

連れ立って追悼式に参列

中村さんは「互いに年を取ったが、青春を一緒に過ごした思い出が蘇った。十五歳の気持ちに戻っていた。」と話し、前田さんは「互いに元気で会えたのが何より。もう胸がいっぱいで言葉にならない。十五歳に別れてからです。中学二年ですからね。」と顔をくしゃくしゃにして喜んだ。

二人は五月の戦没・殉職船員追悼式に参列することを約し別れた。

五月十一日、第三十七回戦没殉職船員追悼式に二人は誘い合って参列した。

広がる青い空の下、式典場から多くの船舶が行き交う姿がみられた。

「大きな船が通った。やっぱり海はいいなと思った。追悼式のことは私たちまで知らされなかったのか、ピーアールされなかったのか寂しく感じた。こういう立派なことがあるのに。来て本当に追悼式をやってくれているんだと思ったら、うれしく感じた。私は生きていたらぜひ参加をしたいと心から望んでいた。戦争で多くの船員が亡くなった。しかし現在の社会には感謝の気持ちがない。それを伝えていきたい」と前田さん。

「感謝の一言。日鉄丸に六十二名くらい乗船していた。日鉄丸で十二名の人が亡くなったわけです。十二名がわれわれの犠牲になってくれたわけです。そのおかげで六十二年ぶりに会えたということは、思いはひとしお強いわけです。

できればもう一度海へ、海に出たいなという気持ちになっている。海は魅力的ですよ。」と中村さん。

碑を前に大海原を望みながら二人は「沈没のとき、何がなんだか分からなかった。あっちこっち、名前を呼び合ったことが印象に残っている。ここで終わりかなと思った。一番に思ったのは両親の顔ですな。子供や孫には同じ思いは決してさせたくない」と平和を願った。【田中佐代子】

投稿

父の遺骨蒐集

秋田県秋田市　升谷恵美子

升谷さんの父
故川内善次郎船長

追悼式のご案内ありがとうございました。

昨年三月父の船そして兄弟船のお問い合わせをさせて頂きました。それによりまして、父に関する掲載されておりました内容が誤りであり、又、不明でありました部分を正しく記載して下さるようお願い致しました。四月二十一日のご返信にて父の生年月日及び職名（船長）を訂正して頂き改めて感謝申し上げます。

御会に訂正方ご依頼申してご返信頂きました頃より、今一度六十年間に知らされました情報を調べ直し、否、調べる必要があるのではと背を押されるようにして動きました。丁度、一年前になります。考えてみますれば、僅か数行の公報が総てでありました。その公報を何度も読み六十年間で私に知らされた事実の一つ一つが符合しました。

しかし、今一つ何かをと訴えられているように感じられ、最後にインターネットにて検索致しました。比島マラパスクア島の観光案内のパンフレットであります。「沈没船オオアキタ丸を探索する旅」とあり、そこには沈没した大秋田丸があり、ダイバーの姿が映った写真でありました。

セブ島にて中央　升谷恵美子さん
右　弟・升谷善次さん　妹・阿部理子さん

良薬を失い時が止まりました。唯、横浜ドックで別れた時の船長としての姿が去来し、港を離れる大秋田丸の勇姿が、今変わり果てて写真にある衝撃を受けました。我にかえり、これは父が私共弟妹に知らせてくれたものと矢も盾もたまらず一日も早く渡比しなければと心ばかりが焦りました。今迄随分と多くの方がたに巡り合いご縁を頂きましたが、此の度も又、素晴らしい方にお逢い出来、そのご縁で総てのお手配を頂きました。

フィリピンは丁度雨季に入る時期でしたが、何はともあれ、六月渡航致しました。成田～マニラ～セブ～マラパスクア島と飛行機・陸路・船と乗り継ぎ現地入り、既にダイバーの方がたが事前調査をして下さっており、緯度、経度等記録より移動していることが判明、六十二年の歳月を思わされました。翌日ダイバーの方がたと同行、船上にて父に万感の思いで心の中で、その時間の中で、今迄ここに到る迄の不思議なご縁そして導きを思わずに居られませんでした。

東京から秋田へ疎開、此の秋田の地が父の総てを知らせてくれる地でありました。終戦後ある偶然から父の最期の様子を生還された方の話として直接聞かされました。それは後の公報にあります事実と合致致しました。

その内容は昭和十九年九月十一日～十二日の詳細なる出来事であります。マニラに向け出港するも戦火激しく民間船舶の輸送船は退避、そこへ十一日深夜セブ島回航に変更になり、急遽各船舶の船長が集まり誰を船団長にすべきかになり、満場一致で父が船団長として翌十二日セブ島北方沖を南下中、敵機七十機編隊に遭遇、航行が不能になるまで応戦、その間、父は船をマラパスクア島南岸百五十メートルに座礁させ、軍人、乗組員、最後に通信士を全員筏で退去させた後、爆弾三発が投下され火災発生、爆発をおこした船と独り運命を共にしたと知らされた通りでありました。

父の最期の船と沈みゆく姿を多くの方がたが特に不思議なご縁と申しましょうか、輸送兵士の方がたが奇しくも秋田連隊でありました事が此処迄詳しく知らされる事が出来、数年前船長は命の恩人ですとおっしゃる方も居りました。想像を絶する状況の中に於いても、皆の下船を確認し沈みゆく船と共にあった船長の姿は神様でした、と秋田部隊の方がたが話されていたと聞きおよび川内善次郎を父にもちました事、誇りに思います。

時間がたちダイバーの方がたの動きが見られ、万に一つの望みであり

ました父の遺骨をお連れ下さいました。奇跡としか思えません。船長は沈みゆく時は、船長室若しくは破損の免れた処にと聞かされておりましたが、父は操舵室に居り運命を共にしたものと考えられます。

六十二年振りに陸に上がりました遺骨は、鉄のような色から空気に触れ白くなり、心から父に労をねぎらい日本に帰るべくお迎えに参りましたと申しました。

父は兵士、乗組員を守り、最後迄船を守り立派に船長としての責務を全うしたと思います。その時の心境を一句詠みました

六十二とせ　ルソンの海に　船とある　父よ帰らん　大和の国に

此の地に御霊があり、父の導きにより多くの方がたのご縁お力を頂きました。大秋田丸、二千七百四総トン船長、川内善次郎の最期をそして生涯を子孫に伝え感謝の念と供養をしてゆきたいと思っております。

直接参列し御会にご報告と思いおりましたが、以前よりの所用のため大変つたない文ではございますが、書かせて頂きました。来年は出席致したく存じます。誠に些少ではございますが、お供え頂きたく同封申し上げました。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

戦時中の思い出

横浜市　小野寺　功一

一、航空機（ゼロ戦）献納式

昭和十八年十月二十八日、海軍大臣代理の海軍少将とその随員の大佐、中佐各一名と大尉を長とする海軍軍楽隊一行（下士官三十三名）が来村して日中は勇壮な軍楽隊の演奏で華やかな式典が行われ、夜は戦意高揚の映画会が開催された。

何しろ田舎の村に海軍の偉い人や海軍軍楽隊が来るなどと前代未聞の事ゆえ、今でも当時の情景がまざまざと思い出される。又、海軍大臣代理の少将閣下が来られると言うことで小学校裏の道に大勢整列して一行を迎えるリハーサルをした。

大和ミュージアムにて小野寺功一さん

「ゼロ戦」「撃墜王坂井三郎」の愛機でも知られている。この機は昭和十二年に海軍の要請で開発され大量に生産された。その抜群の空戦性能でアメリカ側ではゼロファイターといって「ゼロに向かう時は必ず二機でかかれ」と恐れられていた当時の花形機だったが最後は海軍の特攻機として使用された。

二、飛行機献納運動

当時海軍部内で「海軍おばさん」と呼ばれていた横須賀の海軍料亭「小松」の名物女将が、大正の末に鎮守府長官の加藤大将が「飛行機建造費の予算が少なくて困っている」と洩らしたのを聞いて献納運動に立ち上がったのが始まりと言われている。

三、当時の故郷の思い出

アメリカと違って、海上輸送を軽視した軍部の作戦指導で日本の商船は二千五百七十隻を喪失し、船を動かす船員の犠牲は六万人にもなり、海運大手のN社一社だけでもその犠牲は百八十隻の船舶と四千七百人の船員を失った。資源のない日本は軍需、民需物資を南方から運ぶ計画だったが、制海・制空権を失って輸送船が途中で沈められ石油もゴムも食料も入ってこなくなった。

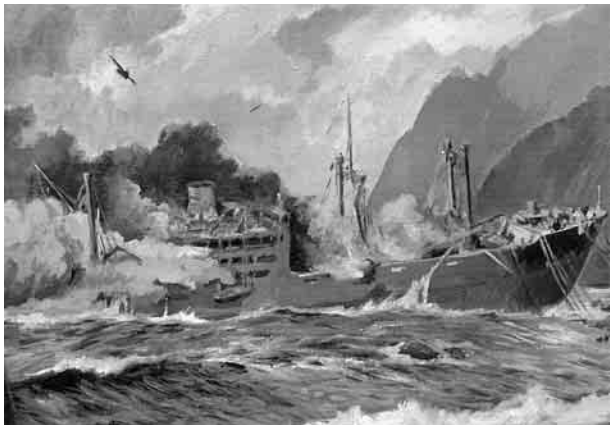
このような情勢なので壮年は兵隊にとられ残った老人、女性、子供も総動員して航空燃料用の松根油堀りや爆薬の原料にする海藻（ホンダワラ）取り、その他に追われた。少しでも食料不足を補う為にと、小学生は田んぼの落穂拾いや蝗捕りに精出し、また白米弁当は贅沢だと非国民扱いされるので海草、野菜、穀類の入った代用食を食べ、出征兵士の留守宅や戦死者の遺族の家に勤労奉仕で三人五人と稲刈りの手伝いなどに行った。

ガソリンがなくバスも木炭車となり、小学校の上級生組は遥かに遠い山奥まで行き、細い冬の山道を足を滑らせながら延々一列になって炭を背負って運んだ事が何度もある。その間には、大人も混じって子供達も空襲に備えての防空壕掘りに動員されて、これも緊急な仕事になった。

麻、綿花の輸送が途絶し、麻ロープに代わって登場した縄の供出、教室では授業がわりの縄ない、これは各家庭にも割り当てられ冬の寒い夜、家庭ぐるみで遅くまで頑張った。綿などの繊維不足で着る服が無くなり衣料用の原料に野草のアカソ採りもした。無論衣料品も衣料切符なる物があって配給制度だが肝心の物が無かった。野草では他に煙草の代用に「いたどり」が珍重された。

ゴムも不足し運動用のゴム鞠は貴重品。小学校では全生徒の目の前で抽選会が行われ、皆固唾を飲んで見守った。戦後にかけても暫くの間はゴム長靴がいわゆる再生ゴムで弾力のない脆い材質だったり、皮の代用に鮫皮など魚の皮が使われた。

戦争が激化して消耗戦に突入すると人命も例外でなく人的資源と言って、いわゆる赤紙一枚で召集されて逐次徴兵年齢が早くなり、その上に平時なら老兵と呼ばれる年代迄召集がかかり、出征兵士の武運長久祈願祭から壮行式、見送り行事が多くなった。


空爆を受け炎上する九州丸（記録画）

当時人口僅か四千人あまりの故郷の村だけでも戦死者が百五十人近くに上がったので学校行事の一環として遺骨迎えや村葬がめっきり増えた。受験地獄とか言われながら塾通いの現代に比較したら、殆んど勉強をする暇は無かったに等しい。

戦争が熾烈を極め総力戦に入ると、小学校にも現在の中学二年生の年齢で、陸海軍の少年兵志願や満蒙開拓義勇軍とか、軍需工場行きの産業戦士の割り当てが来て、戦争を勝ち抜く為と勉強どころでは無かった。

小学校では毎日、戦局のニュースが聞かされ、遂に海軍の少年兵志願が始まった。先生の話ですっかり洗脳(?)され、少年兵志願に必要な願書に父親の印鑑を押してくれるように言ったら、父は「うちでは二人も兵隊を出している。国のためには十分尽くしている」と「今この非常時にそんな事を言うのは非国民だ」と反発、困り果てた親父が「勉強したければ上級学校でも何処でもやるから希望の学校の試験を受けて」と泣き落としにかかった。今にして思えば前の家がビルマ戦線で、隣がガダルカナルで、本家の叔父が関東軍でフィリピンに向かう途中の輸送船で台湾沖で空爆で戦死と悪いニュースが連日続いた当時、男三人の二人が戦争に駆り出されていたので不安だった事と思う。

部落でも比較的に田畑が多い方で、体の弱い母と義姉と留守勝ちの父で働き手が足りないので、私はとうに進学は諦めていたので受験の機会は過ぎていた。

昭和十七年八月七日、太平洋戦争で有数の激戦地となったガダルカナルとツラギに米軍が反攻して上陸した。そして八月十八日には郷土出身者が多かった一木支隊が全滅し、川口支隊、第二師団丸山兵団と数度に渡る奪回を試みた日本軍も半年後の翌年二月七日遂に力つきて最後の撤退をした。それから二ヶ月後四月十八日には連合艦隊司令長官の山本五十六大将が一式陸攻二機と護衛のゼロ戦六機で前線視察に向かったが、ブーゲンビル島南部で待ち伏せた十六機のロッキードP38に襲われブイン方面で戦死した。六月五日、山本五十六元帥の国葬が執り行われ、小学校でも全校生徒が校庭に並んで校長先生の訓示を聞いて黙祷。

最後の撤退から半年後の八月七日に村ではガダルカナル島戦死者の村葬があった。我が家の隣を始め、近所だけでも三人の戦死者が出て、兄二人が戦地に行っているので何とも言えぬ気持ちになった。五月二十九日アッツ島守備隊玉砕、二ヶ月後の七月二十九日アッツ島近くのキスカ島守備隊撤退と暗いニュースが続いた。戦死した連合艦隊山本長官の後任の古賀長官も昭和十九年三月三十一日殉職し、子供心にも戦局の行く末に不安が感じられた。

昭和二十年三月十日の東京大空襲を皮切りに地方都市でも空襲が始まった。七月九日には仙台が空襲され、八十キロも離れていたが双眼鏡で見るとサーチライトで照射されたB29の主翼の下部が夜目にも判る様に光ってうつった。

青森の三沢航空隊を空襲したB29の編隊が、夜空に轟々と爆音を響かせて南下を続け、上空を去るまでの長い時間、不気味な爆音に不安で見守った。

濃霧の季節の七月下旬、上空の霧の中で爆音がして飛行機が何時までも旋回を繰り返している様子で不審に思った。戦後判明したが気仙沼近郊の新月に不時着して炎上した海軍の輸送機と聞いた。

七月十四日午後、米太平洋第二機動部隊（後に降伏文書調印式が行われた「ミズリー号」を含む戦艦三隻と空母四隻に巡洋艦二隻、駆逐艦六隻の大部隊）が北海道の室蘭製鉄所に激しい艦砲射撃と空襲を開始した。そしてその艦載機群の内の二機が気仙沼に飛来して偵察空襲をしたその日、我が家では気仙沼の親戚に不幸があって、朝早く母と妹が行ったがなかなか帰って来ないので家族一同心配して居たら、夕方暗くなってようやくに戻って来てほっとした。法事の最中に、空襲に見舞われ避難するにも町の中は危険で山道や木陰伝いにやっと逃げてきたとのことだった。木炭バスも全てストップし十二キロの道をハラハラしながら

やっと辿り着いた感じ。

やがて室蘭製鉄所の攻撃を終えて機動部隊が三陸沿岸に接近して釜石製鉄所の艦砲射撃を始めて朝からドーンドーンと腹に響く不気味な地響きがした。八月に入り釜石の攻撃後に更に南下した機動部隊が近くに居据わり艦載機が編隊を組んで飛来しての本格的な空襲が始まった。気仙沼やその近郊の我が故郷大谷方面では九日・十日と朝早くから夕方迄空襲が続いた。気仙沼の隣の鹿折の缶詰工場と松根油工場には五十キロ爆弾が投下された。（終戦後に見に行ったら、その跡には直径五～六メートルの穴が出来て池になっていた）

気仙沼・鹿折・大島地区では機銃掃射や爆撃による犠牲者も出た。私の家でも朝からの空襲に懲りて、艦載機が母艦に帰るのを待って九日夜少しばかりの家財を疎開させるためにリヤカーに積んで少し山の方にある叔父の家に向かった。途中で頭の上をスレスレの超低空で双発機が何機も南に飛んで行った。リヤカーを曳いていた母が「又、敵機か」と言ったが夜空にもそれと判る特徴ある胴体の形状から味方の九九双軽（九九双発軽爆撃機）と説明して安心させた。

米国のＦ６Ｆ戦闘機

疎開先の叔父の家に着いたらラジオがソ連の参戦を放送したと叔父に知らされた。弱り目にたたり目と言うか日ソ不可侵条約も一方的に破棄された。この先どうなるのかと思い、急に不安と脱力感にガックリした。

一方、大本営発表によれば帝国海軍航空部隊は金華山沖の敵機動部隊を攻撃し多大の戦果を揚げたと発表したので心強く感じた。（先ほどの九九双軽群が攻撃した様子）

翌十日は朝早くから、義姉が台所で避難準備の弁当作りをしている最中に爆音が聞こえて母がカン高い声で叫び大急ぎで布団の陰に身を伏せた直後に台所付近にバラバラと機銃掃射の弾が飛んで来て、そこに置いてあった洗面器に穴があいて間一髪助かった。

この頃、日本側は艦載機を迎撃出来る状態に無いので、戦闘機のグラマンＦ６Ｆとか雷撃機ＴＢＦが無抵抗に乗じて我が物顔に飛び交っては犬の子まで射ちまくった。

朝、夜明けと同時に沖の空母からやって来て上空で編隊を解くと後は、自由行動で思い思いに射ちまくって夕方になると海上に帰って行った。何かスポーツ気分で楽しんでいる風にも見えた。最初グラマンＦ６Ｆの時は頭上を過ぎて四十五度になれば安心と教えられていたのでノコノコ出ていったら、後ろからも機銃掃射をされた。一人乗りのＦ６Ｆから後部に銃座のある三人乗りのＴＢＦ（雷撃機）が登場したのだった。

近くにある松根油工場（航空機燃料用）が狙われ空襲されて空高く黒煙を上げて燃え続けた。敵上陸に備えて婦人会の竹槍訓練が始まった。学校の掲示板には大きく「沖縄の小学生達は爆薬を抱いて戦車に突っ込んだ。本土の小学生も負けずに続け」と書かれていた。蛸壺（壕）に隠れて敵が上陸して戦車が接近したら爆薬を抱いて一気に突っ込めと教えられ真剣にその心構えになっていた。

二十歳までは生きられぬと思っていた時代だった。今、思い返せば一笑に付され荒唐無稽と言われるかも知れないが、戦時中は無我夢中で信じて居た。

先のイラン、イラク戦争でホメイニ師の教えに殉じアラーの神を唱えて命を捨てているイランの少年兵の姿を見て、かつての自分達の姿がオーバーラップした。あのまま戦争が後一年続いたらどうなっただろう。もう二度とあの様な経験はしたくないものである。

新加入会員ご紹介

当会は、日本海事財団の補助金、基本財産の利息収入、主要海運会社や関係団体等の賛助会費により運営されておりましたが、本年四月より日本海事財団の補助金は打ち切られ、利息の激減や海運会社合理化にともなう退会等により非常に厳しい運営を強いられております。

そのような中でご遺族や関係者のご協力をいただき、慰霊、顕彰、援護事業を支える協賛会員制度（年一口三千円）が設けられております。

平成十八年十二月以降、次の方がたが賛助会員・協賛会員に加入されました。ここに厚く御礼申し上げます。

（敬称略・順不同）

◇賛助会員

福岡眞人、仁藤直嗣

（財）海技振興センター

◇協賛会員

阿久津　智、井口留理子、星野英昭、金子　健、西尾光憲、小野寺麗子、熊田高幸、前田俊文、玉木義行、清井悦子、中村幸三、砂子賢馬、横山明子、松本和子、室岡　卓、松井由美子、小池松次、伊藤　明、鈴木愛、村上昭造、小田原喜久、後藤泰清、信木　隆、谷　克巳、柳野義見、滝澤節子、山﨑規世、大林　原

ご寄付・追悼式献花料

平成十八年十二月以降、次の方がたからご寄付、追悼式献花料をいただきました。厚く御礼申し上げます。

（敬称略・順不同）

寄付金

前田俊文（三重県志摩郡阿児町）久保雅義（神戸市）海事思想普及研究会（神戸市）新藤博志（横浜市）高倉洋子（金沢市）室岡　卓（北上市）橋本政雄（東京都渋谷区）梅田義孝（横浜市）福田陽子（雲仙市）河合ハル子（横浜市）

献花料

米山隆昭（東京都北区）河方満智子（豊中市）川畑實恵（明石市）宮越和子（佐倉市）伊藤慎介（東京都千代田区）山下琥生（東京都世田谷区）小林義隆（篠山市）金田光蔵（鹿児島市）全日本海員生活協同組合理事長井出本榮（横浜市）河内フサヱ（神戸市）福岡海寿会（福岡市）山田利政（松江市）嶋田早苗（京都府八幡市）加藤榮治（岐阜市）門田富雄（福岡市）渡辺光（山陽小野田市）西嶋忍（大阪市）阪口勝子（草津市）入沢鉄郎（越谷市）土居和子（大阪市）高等商船学校三期会（東京都北区）長野ヨネ子（東京都中野区）鴨志田米造（松戸市）井上稔子（姫路市）升谷恵美子（秋田市）大和田吉雄（茨城県東茨城郡大洗町）ともづな会（東金市）山下義韶（神奈川県中郡二宮町）匿名、池原田鶴（横浜市）石須由美（富山市）伊藤春子（豊田市）猪股貞雄（清瀬市）猪股正昭（横浜市）猪股保雄（東京都足立区）岡　順二（津市）小泉義男（日立市）桜井　正（千葉市）佐野恵美子（横浜市）沢畑美恵子（日立市）鈴木富美子（横浜市）高垣宏江（神戸市）高垣幸徳（神戸市）中野昭男（名古屋市）中村良秋（松戸市）西川克己（神戸市）根本靖子（瀬戸市）平岩千代（横浜市）藤井靖子（府中市）古川　昭（日立市）全国戦没・殉職船員遺族会会長堀田明道（横浜市）升田紀子（横浜市）松原康夫（神戸市）丸木百合子（横浜市）三浦　功（東久留米市）山岸信一（前橋市）山本艶子（伊勢原市）家田富子（東海市）小野寺麗子（気仙沼市）鈴木富喜子（横浜市）善積加代子（北海道上磯郡上磯町）高橋弘子（石巻市）平井ミホ（長崎県北松浦郡佐々町）福田陽子（雲仙市）浦賀警察署長長谷川茂（横須賀市）日本船員厚生協会会長友國八郎（川崎市）全日本海員福祉センター（東京都港区）日本内航海運組合総連合会（東京都千代田区）全日本船舶職員協会常務理事猿渡國雄（東京都千代田区）浪速タンカー株式会社社長福岡孝一（東京都港区）南洋海運株式会社代表取締役坂間　聡（藤沢市）相田和男（横浜市）高等商船学校一期会（横浜市）明星英子（横浜市）荒川　博（三鷹市）五十嵐温彦（大和市）小松和夫（横浜市）才津俊朗（横浜市）坂本元夫（横須賀市）鹿児島商船学校京浜支部長徳田　巽（日野市）庄司和民（藤沢市）砂子賢馬（横浜市）竹端昭治（豊中市）都竹利年雄（東京都杉並区）長島　弘（横須賀市）武馬竹光（一宮市）牧　正雄（府中市）三宅　弘（逗子市）三輪史郎（千葉県印旛郡富里町）山川澄男（横浜市）横尾英二（逗子市）吉野明（横浜市）原　昭三（横浜市）曽根幸雄（横浜市）吉野則忠（横浜市）渡辺政能（藤沢市）河合ハル子（横浜市）全日本海員組合関東地方支部執行部OB会（横浜市）高等商船学校二期生会（横浜市）松浦郁郎（横浜市）日本中小型造船工業会会長石渡博（東京都港区）海防艦顕彰会連合会長（東京都渋谷区）水交会（東京都渋谷区）船員保険会会長佐々木典夫（東京都渋谷区）全国海運組合連合会会長四宮　勲（東京都千代田区）日本船員福利雇用促進センター（東京都中央区）偕行社（東京都千代田区）船員保険会常務理事福岡眞人（東京都渋谷区）全国海友婦人会会長橋本則子（神戸市）鴨居三軒谷町内会会長鈴木眞一（横須賀市）横須賀市東部漁業協同組合鴨居支所（横須賀市）鴨居地区連合町内会（横須賀市）日本郵船株式会社郵和会（横浜市）飯田喜久三（東京都渋谷区）貝谷アキ子（一宮市）平野　彌（横須賀市）近歩二会（志木市）菅井善三（東京都新宿区）横須賀海洋少年団（横須賀市）横須賀海洋少年団父母の会（横須賀市）池田俊宣（横浜市）榎本泰（横浜市）鈴木武雄（横浜市）大林原（横浜市）丸山燁吉

役員・評議員の一部交替

当会の新役員は五月二十三日の評議員会、及び二十四日の理事会で選任されました。再任者は省略し新任者の役員及び評議員は次のとおり。

「理事」

新任　森谷　進伍
（財）海技振興センター理事長

退任　黒田　不二夫

「評議員」

新任　宮寺　重男
（社）日本船舶機関士協会専務理事

宇多　一二
（財）海技教育財団理事長

小野　嘉久
（財）海技振興センター常務理事

退任　猪狩　紀一、勝野　良平

日下　治夫

殉職船員遺族援護事業
保護者からのお便り

愛媛県　松田優美子

左から　貴美子さん　龍治くん　忠士くん　義生くん

四人とも元気で明るく生活しています。義生は、この春から親から離れ、ひとり下宿生活をしていますが、野球に勉強に頑張っています。

宮城県　阿部　悦子

日日ありがとうございます。ようやく二人目の娘も無事高校に入学することができました。

遺児援護金を頂き支えられここまでくることができ、とても感謝しています。ありがとうございました。

阿部沙也加さん

宮城県　阿部　沙也加

勉強と部活頑張ります。

中野祥吾君

宮城県　中野　祥吾

時がたつのはすごく早くもう二年になります。

お陰様で中学を卒業し高校に入学しました。中二の七月に父を亡くしたので「高校には行かない」と考えた時もあったけど、今はいろんな人達に励ましの言葉をもらい、助けられ、高校に入学することが出来ました。

とりあえず今は無遅刻無欠席を目標に高校生活を頑張っています。

六年生の弟も学校行事や少年野球でも頑張っています。五月の選抜大会では初優勝をしてきました。そんな弟を応援していきたいと思います。

本当にありがとうございました。

右　濱本さつきさん　左　隼くん

長崎県　濱本　さつき

高校入試も無事に終わり、第一志望校に合格することが出来ました。援護金ではお世話になりました。まだまだ、教育費がかかるようですので、ありがたく使わせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

宮城県　中野　幸枝

援護金本当にありがとうございました。二十三号の「潮騒」の殉職船員遺族のお便りの中の同じくらいの子どもや、もっと小さいお子さんを育てている方がたの文を読んで、励まされたように感じました。みんな頑張っているんだなぁーと。同じ境遇の方がたを他人とは思えず身近に感じることが出来ました。

おかげ様で長男は春から高校生になります。次男は六年生になり、ますます野球に励んでいます。

事故から二年。子どもたちには今までと変わらない生活を送らせることが私の思いです。

子どもたちは、昨年一年間、風邪もひかず無欠席で学校生活を送ることができました。これからもよろしくお願い致します。

宮城県　高橋　弘子

この度は大変お世話になりありがとうございました。

初めて追悼式に参列させて頂き感無量で帰宅しました。式典には小泉前総理を始め、数多くの著名人の方がたにも参列いただき遺族の一人としてとても胸が熱くなりました。いつもは寝たり起きたりしております両親もぜひ参列したいと申しますので家族全員での参列でした。中学生の子どもたちにはとてもすばらしい経験をさせていただき感謝しております。

当日は、とても強い風で「式典は出来ないのではないだろうか」と思っておりましたが、式典の時間には風も凪ぎ青空になりました。二羽の鴎が式典会場の上を二度三度と円を描くように飛び回り私には御霊が皆様に感謝をしているように思えてなりませんでした。

全国より参列の皆様はご年配の方が多く、お話をした時の「ここに眠る方がたのおかげで今の日本がある

左から飛翔君　弘子さん　倭君　弘子さんの父浅野俊吉さん

のですから感謝をこめて私の体力が続く限り参列させて頂きたいと思っています。」というお言葉がとても印象に残りました。

顕彰会の皆様、海上自衛隊の皆様本当にありがとうございました。

また、ぜひ参列させていただきたいと思っております。

全国戦没・殉職船員遺族会の解散

「全国戦没殉職船員遺族会は、平成十九年五月十一日に総会を開いて解散し、今後の扱いについては、財団法人日本殉職船員顕彰会にお願いしたい」とのお話を堀田明道前会長よりいただきました。

当会といたしましては、前会長はじめご遺族の方がたの心情に照らし、皆様のご意向を尊重しながら、今後の対応をしてまいりたいと考えております。

前会長堀田氏のご挨拶を掲載いたします。

全国戦没・殉職船員

遺族会解散のお詫び

旧全国戦没・殉職船員遺族会
会長　**堀田　明道**

全国戦没・殉職船員遺族会は、平成十九年五月十一日に総会を開いて解散、残された事業と運営を（財）日本殉職船員顕彰会に託することに致しました。

これまでの間、会員の皆様方をはじめ、関係する諸団体の方がたなど何時も当会の事業にご協力くださり、感謝致しております。誠に有難う御座いました。

この間、会員の皆様方には事務の停滞などでご無沙汰いたし、大変ご迷惑をお掛けして参りましたが、このままでは会の存在価値も無に等しくなると判断し、最高幹部により協議した結果、昭和二十七年来の五十五年間に亘る活動を残念ながら停止することに致しましたので、ここにご報告致します。

遺族年金獲得のために結成されました遺族会も、戦後六十三年間の星霜を経て親睦団体として変遷して参りました。五代にわたる会長の方がたは既に物故され、六代目の小生も十四年間の会長職により会を支え今日に至っておりますが、近く傘寿を迎えることとなりました。

会員の皆様方も代替わりや老齢化などで、当会独自の行事にもお出かけ頂けないことが多くなり、現在は顕彰会主催の慰霊祭への出席が唯一の拠り所となっております。

このことから「慰霊の火は消さず」をモットーにして来ました遺族会の使命も、ここに限界を迎えたと判断した次第です。

平成十二年の第三十回戦没・殉職船員追悼式に初めて天皇・皇后両陛下の行幸啓が実現し、平成十七年七月の終戦六十周年記念の「戦没・殉職船員遺族の集い」にも両陛下のご臨席を賜り、更にはその年の十月には両陛下が当時の清子内親王を伴われて観音崎の戦没船員の碑にご供花賜るなど、遺族会会長として三度にわたり両階下から親しくお言葉を賜る光栄に浴しましたこと、生涯の誉れとさせて戴いております。

それもこれも、会員の皆様方のご協力の賜物と感謝しておりますが、それも年ねん皆様方の年齢や御体の具合で細々とした開催となってまいりました。昨十八年の新年会には幹部三名と会員二名の僅か五名のご参加という事態に愕然とし、今後の会運営に限界を感じた次第で御座います。加えて、事務担当者の不在という事情も加わり、会の運営を断念いたしました。

この間平成九年には会の強化と若返りを図るため、殉職船員ご遺族にも門戸を開放し、会の名も「全国戦没・殉職船員遺族会」と改名いたしましたが、戦没と殉職の感覚的な隔たりもあってか、良かれと実行した思惑は全く外れ、殉職船員ご遺族の入会は殆ど無く現在に至ったわけで、このことも会の寿命を縮めた一端と思っております。

なお、今回の措置につきましては、会員の方がたからご意見も頂戴したところ、殆んどの方からご賛同をいただき、むしろ今までの運営に感謝される内容には正直に言って、ホッと致しております。

今後は(財)日本殉職船員顕彰会にご協力し、遺族会そのものはなくなりましたが、皆様と共に慰霊の誠を続けていく所存ですので、どうぞ宜しくお願いいたします。

十一月千葉市で開催

戦時徴用船遭難の記録画展

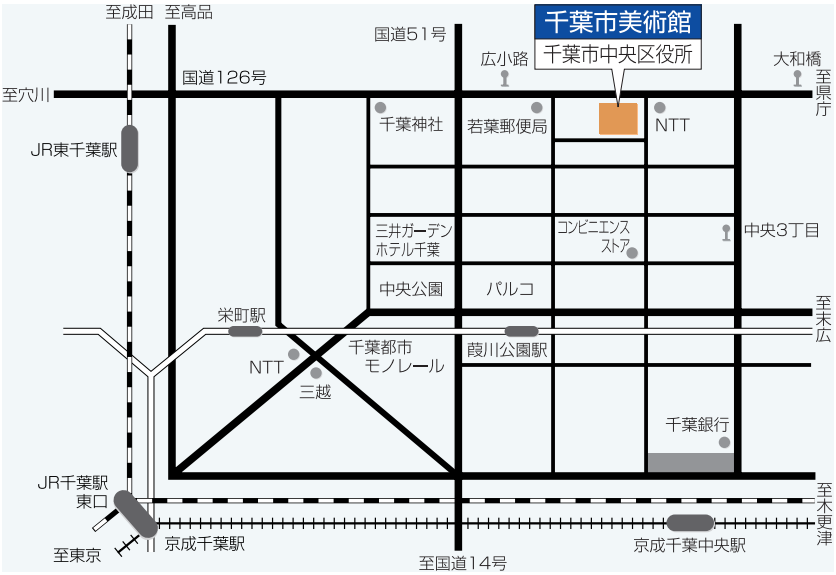
今年の記録画展は十一月二十日（火）～二十五日（日）千葉市美術館市民ギャラリー（千葉市中央区）で開催します。

開催の趣旨

わが国の海運・水産界は、さきの大戦において六万余人に及ぶ尊い船員の生命と二千五百隻八百四十万総トンを超える船舶を失うという大きな犠牲を払ったが、その実相を伝える資料はほとんど残されていない。

昭和五十七年春、株式会社商船三井の本社倉庫から大阪商船（現商船三井）の嘱託画家　故大久保一郎氏が戦時中に描いた戦時徴用船遭難の記録画三十七点が見つかり、同社は日本有数の絵画修復家黒江光彦氏に依頼し、これらの絵を完全修復した。私達は、戦没された船員の労苦をしのび、その霊を慰めるとともに世界の海の永遠の平和を願い、同社のご協力を得て、全国各地に赴き絵画展を公開している。今日ではこの催しが、ご遺族や関係者に当会の慰霊・追悼事業を周知する手立てにもなっている。

交通案内



ＪＲ千葉駅東口より　　千葉市美術館　〒260―8733千葉市中央区３―10―８

■徒歩15分

■千葉都市モノレール県庁前方面行「よしかわ公園駅」下車徒歩５分

■京成バスのりば７より大学病院行又は南矢作行にて「中央３丁目」下車徒歩２分

事務所移転しました

同じビル２階から５階へ

当会事務所は海事センタービル内の二階から五階へ移転しました。七月二十八日～二十九日引越作業、三十日より新事務所で業務を開始しております。細かな整理が出来ず雑然としておりますが、一度お立ち寄り下さい。電話ファックス等従来どおりです。

事務局より

◇人事異動

昨年十月一日より臼居勲理事長が常勤になり、本年三月三十一日富澤英二事務局長が退職しました。齋藤清伍常務理事、伊藤虔二・田中佐代子職員の四人体制で業務を遂行しております。

◇ご投稿お待ちしております

お願いできれば千六百字程度にとりまとめ、関連写真がございましたら同封いただければ幸いです。当会で若干修正させていただく場合もございますが、ご了承ください。

編集後記

例年のとおり五月十一日に追悼式が行われた。準備作業は早朝から始まり、参列者の受付は九時から開始される。進行の説明開始まで一時間四十五分ある。ご高齢の方が長時間待機している。この待機の一時、演奏をお聴きいただこうとの趣旨で、今年は海上自衛隊のご理解とご協力をいただき、開始前の十五分間、音楽隊による三曲が演奏された。参列者からの拍手があり、また、後日、「音楽隊の演奏良かったですね」とのお話を受け、次年度の検討材料にさせていただいた。

当日は風が強く、中断も懸念されたが、予定通り終了し、参列者・関係者の皆さんに感謝です。（齋藤）